

オンチ

夢野久作

青空文庫

一

大戦後の好景氣に煽られた星浦製鉄所は、昼夜兼行の黒^{くろけむり}煙を揚げていた。毎日の死傷者数名という景氣で、数千人を収容する工場の到る処に、殺人的な轟^{ごうおん}音と静寂とがモノスゴく交錯していた。

汽罐場の裏手に在る庭球場は、直ぐ横の赤煉瓦壁に静脈管のように匍^はい付いている蒸氣管のサイサイ、スウスウ、プウプウいう音で、平生でも審判の宣告や、選手の怒号が殆んど聞こえなかった。テニスの連中はだから皆ツンボ・コートと呼んでいたが、それがこの頃では一層甚しくなつて来たために不愉快なのであろう。滅多にテニスをしに来る者が無くなった。

しかしその淋しい審判席の近くに、誰が蒔いたかわからないコスモスの花が咲乱れる頃になると、十月十七日の起業祭が近付いて来るので、正午^{ひる}休みの時間に、時々職工達が芝居の稽古に来る事があつた。

秋日のカンカン照っているテニス・コートの上で、菜^{なつば}葉服の職工連が、コスモスの花を

背景にして、向い合ったり、組み合ったりして色々なシグサを遣るのはナカナカの奇観であつた。近まわりの工場の連中がワイワイ取巻いて見ているうちに、お釜帽かまぼうを冠つた機械油だらけの職工が、板片いたきれの上に小石を二つ三つ並べて、腰元らしく尻を振り振り登場すると皆、一時にドツと笑い出したりした。勿論セリフは全くわからないし、身形みなりも作らない作業姿なので、最初は何が何だかさっぱりわからなかったが、だんだんと場面が進行するにつれて外題げだいがわかつて来た。二人きりで相手を蹴倒おすのは「熱海海岸あたみの」。鉄砲を撃つのは「山崎街道」。大勢で棒を担いで並ぶのは「稲瀬川いなせ勢揃い」。中には何が何やらわからない新劇もあるが、そんなものでも誰云うとなく「嬰兒殺し」だの「夜の宿」だのとわかつて来るようになったので、しまいには一組も稽古に来ないようになってしまった。

つまり演やる方では大丈夫、わからないつもりで演っているのを、見物の方で一生懸命になつて筋を読み取ろうとする。寄つてたかつて外題の当てつこを競争するようになったので、各工場の演物だしものを秘密にしたい気持から、どこか、ほかの処で稽古をするようになったらしかった。

二

十月十日の水曜日の午前九時頃のこと。汽罐部の夜勤を終った職工が三人、そのツンボ・コートを通^{とおりぬ}抜けて来た。

中央に立つて歩いて来るのは、この製鉄所切つての怪力の持主で、名前は又野末吉、綽^あ名をオンチという古参の火夫であつた。体重百四十斤^{きん}に近い、六尺豊かの図体で、一番の菜葉服の襟首や、袖口や、ズボンの裾から赤黒い、逞ましい筋肉が隆々とハミ出しているところは、如何にも単純な飾り氣のない性格に見える。のみならず、いつもニコニコしている小さな眼の光りが、処女のように柔和なので、さながらに巨大な赤ん坊^{おおき}のように見えた。

その大股にノツシノツシと歩く又野の右側から、チヨコチヨコと跟^ついて来る小柄な男は、油差しの戸塚という青年で、敏^{はしこい}捷^{すば}らしい眼に鉄縁^{てつぷち}の近眼鏡をかけている。色の黒い、顔の小さい、栗鼠^{りす}という綽名に相応^{ふさわ}しい感じの男。又、左側に大股を踏んばって、又野と歩調を合わせて来るスラリとした好男子は、修繕工の三好^{さんこう}といって、相当学問のある才物らしく、大きな擬鼈^{まがいつこうづち}甲縁の眼鏡をかけているが、三人とも無言のまま大急ぎでツンボ・

コートを通抜けて、広い面積に投散らしてある鉄材の切屑をグルリとまわって、事務室の前から正門を通る広い道路まで来ると、やつと又野が口を利き出した。

「ああ。やつとこき話の出来^{でけ}る処^{とこ}まで来た」

「まったく……あのスチームの音は非道^{ひど}いね。創立以来のパイプだから、塞^{ふさ}ごうたつて塞ぎ切れるもんじゃねえ」

三好が振返つて冷笑した。「会社全体が、あの通り調子付いていやがるんだからな」

「シツカリ働け。ボーナスが大きいぞ」と又野が巨大な肩をゆすぶって見せた。三好が今一度冷笑した。

「テヘツ。当てになるけえ。儲けとボーナスは重役のオテモリにきまつてらあ。働らくものはオンチばかりだ」

「この野郎……」と又野が好人物らしく笑いながら拳固を振上げた。三好が一間ばかり横に飛び退いた。

「アハハハ。その代り起業祭の角力^{すもう}の懸賞はオンチのものだろう」と戸塚がオダテるように又野を見上げた。又野が苦い顔をして笑った。

「インニヤ。俺あ今年や角力取らん」

「エッ」二人とも驚いたらしく又野の顔を左右から見上げた。又野は真剣な——しかし淋しそうな顔をしていた。

「馬鹿な……オンチだなあ……みんな期待しているんじゃないか。鼻の先に水引みずひきがブラ下がっているんじゃないか。今年の起業祭には会社が五千円ぐらいハズムってんだから懸賞の金だつて大きいにきまつているんだぜ。何故、取らねえんだ……オンチ……」

「ウウン。それじゃけに俺あ取らん。キット取れるものをば毎年、取りに出るチウ事は、何ぼオンチでも面火つらびが燃えるてや……のう……」

といううちに又野はモウ赤面しながら苦笑した。正直一徹な性格が、その苦笑の中に溢れ出ていた。

「惜しいなあ。みんな君の力を見たがつているんだになあ」

と三好が諛へつらうように又野を見上げた。その時に又野がパツタリと立止まった。

「アツ。きようは十日……俸給日じやろ」

「アハハ。いよいよオンチだなあ。だからこうして事務室の方へまわっているんじゃないか」

「俺あ徹夜が一番、苦手じや。睡うて腹が減つて叶かなわん。頭がボーとなつて来る」

又野が毛ムクジャラの手の甲で顔をゴシゴシとこすった。ほかの二人も立止まった。

「ハハハ。俵給を忘れる奴があるかえ」と、笑いながら三好がポケットからバットの箱を出した。

「俵給は十時から渡すんだっけな」と戸塚もカメラリヤの袋を出しかけた。

「……オイ……あれを見い……」

と又野が突然に背後を指した。

鉄屑の堆積越しにコスモスのチラチラ光るテニス・コートの向うから、事務員風の男が来かかっている。霜降背広に、カラの高い無帽の男で顔はよくわからないが、黒い鞆を両手で抱え込んで、何か考え考え俯向き勝ちの小急ぎに、灰白いサーブ・ラインを横切つて来る。

その背後から今一人、鳥打帽を目深く冠つて、黒い布片で覆面をした菜葉服の男が、新しい地下足袋を踏み締め踏み締め、殺気立った足取で跟いて来る。軍手を穿めた手にステッキ位の黒い棒をシツカリと構えているが、腰を屈れているので背丈の高さはわからない。「へへッ。……初めやがった。どこの工場だろう」

と三好が朗らかな口調で云った。三人は黙って見ていた。

そのうちに事務員風の男が、自分の影法師を踏み踏み、コートの中あたりまで来たと
思うと、その背後うしろから、急に歩度を早めた菜葉服の男が躍りかかって、無帽の男の頭を黒
い棒で殴り付けた。事務員風の男は一タマリもなく、黒い鞆を投出してバツタリと俯向うつむ
けに倒おれた。

「アッ。殺やりおったぞ……」

と又野が引返して駆出そうとするのを、三好と戸塚が腰に抱き附いて引止めた。

「……馬鹿……まあ見てろ……」

「……何……何かい……」

行きかけた又野が青くなつて振返つた。歯の根をガタガタいわせていた。

「……ヒ……人殺しやないか……」

三好が白い歯を剥出むきだして笑い笑い又野の前に立塞たちふさがった。

「アハハ……馬鹿だな。よく見てろつたら……あれあ芝居だよ。芝居の稽古だよ。第三工
場の奴かも知れねえ」

又野が太い溜息を吐ついた。そのまま棒立ちになつて見ていた。

テニス・コートの上の菜葉服は、黒い棒を投棄てた。それは重たい鉄棒らしかったが、

直ぐに事務員風の男の頭の処に走り寄つて、顔を覗き込んだ。すると思いがけなく事務員風の男が半身を起して、盲目滅法に掴みかかったので、菜葉服の男は面喰つたらしい。その手を払い除けると、一度投棄てた黒い棒を取上げて身軽く事務員風の男の背後にまわつた。こちらに背中を向けて黒い棒を振上げると、手といわず頭といわずメチャメチャに殴り付けて、とうとう地面に平つたくなるまでタタキ付けてしまったらしい。それはさながらに蛇をタタキ殺す時のように執拗な、空恐ろしいような乱打の連続であつた。それから立上つてズボンのポケットから白い、折目正しいハンカチを引出して、帽子をすこし阿弥陀にしながら大急ぎで額の汗を拭いた。すべてが声の無いフィルムそのままの光景であつた。

「ソレ見ろ。芝居じゃねえか」

「しかし真剣にやりよるのう」

「何だろう……探偵劇かな」

大急ぎで汗を拭いた覆面の菜葉服は、コートの上に投出された鞆を引つ抱えるとキョロキョロとそこいらを見まわした。遥かに三人の姿を認めたらしく、白い軍手を揚げてチョット帽子を冠り直すと、そのまま第三工場の鑄造部附属の木工場の蔭へ走り込んで行つた。

コスモスが風に吹かれて眩しく揺れ乱れた。

その時に、あとに残った事務員風の男は、すこしばかり身動きしかけたようであったが、そのままグーツと身体からだを伸ばした。その拍子に白い額が真赤に血に染まっているのが見えた。

「アツ……本物だつ……」

三人の職工は誰が先ともわからないまま現場げんじょうに駆付けた。

しかし、すべては手遅れであった。事務員風の男は頭蓋骨をメチャメチャに碎かれていたが、その凄惨な死に顔は、真正面まともに眼を当てられない位であった。その枕元に突立った三人は、無表情に弛んだ真青な顔を見交すばかりであった。

そのうちに両眼に涙を一パイに溜めた又野が、唇をワナワナと震わした。感情に堪えられなくなったらしくグツと唾液つばを呑んで、足元の無残な血だらけの顔を力強く指ゆびさした。

「……ミ……見い……これが……芝居かッ……」

又野の両頬を涙がズウーと伝い落ちた。火の付くような悲痛な声を出した。

「……わ……わ……汝輩われどもが二人で……コ……殺いたんぞッ……」

二人は恨めしそうな眼付で、左右から又野の顔を見上げた。しかし今にも飛びかかりそ

うな又野の、烈しい怒りの眼付を見ると、何等の抗弁もし得ないまま一縮みになってうなだれた。申合わせたように自分自分の影法師を凝視しつつ、意気地なく帽子を脱いだ。

それを見ると又野も、思い出したように急いでお釜帽子を脱いだ。死骸の顔を正視しつつ軍人のように上半身を傾けて敬礼した。何事か祈るように両眼を閉じると熱い涙をポタポタとコートの上で落した。

「……すまん……済みまっシエン……」

遙か向うを通る四五人の職工が、鉄片てつきれの堆積越しにこちらを見て、ゲラゲラと笑いながら事務室の中へ這入って行った。やはり芝居の稽古タオルと思ったのであろう。

その間に死骸の顔の血を、自分の西洋手拭タオルで拭いてやっていた戸塚は、突然に大きな声で叫んだ。

「……ウワアツ……西村さんだっ……」

「ナニ。何だって……」

とほかの二人……又野と三好が顔を近寄せて来た。スチームの音で聞こえなかったらしい。

「事務所の西村さんだよ。俸給係の……」

「何だ……俸給がどうかしたんか」

「馬鹿ツ。この顔を見ろツ。俸給係の西村さんだぞツ。俺達の俸給が持ってかれたんだツ」と早口に叫んだ戸塚は、ほかの二人が呆氣あつけに取られているうちに素早く、直ぐ横の木工場に飛込んで行つた。犯人のアトを追って行つたらしかった。

しかし戸塚は、そのまま帰つて来なかつた。

木工場と鑄造場と、その向うの薄板工場うすいたと、第一工場のデッキの下を潜り抜けて、購買組合の前から通用門を抜けると往来へ出る。そこから一気に警察へ駆け込んで行つたのであつた。

三

警察はちやうど無人ぶにんであつた。海岸に漂着死体が在るという報告で、出動した後だったので、居残つていた田原という警部が、戸塚の話の聞いて、外から帰つて来たばかりの思想係りの楠くすのきという刑事を呼んで一所いっしょに出かけようとした。そこへ又けたたましく電話がかかつたので、田原警部が剣を釣りながら聞いてみると、今度は製鉄所の事務室から三好

という職工が掛けたものであった。

田原警部はチエツと舌打をした。直ぐに小使を呼んで名刺の裏に鉛筆で走り書きをして海岸に走らせた。

「楠君。君、署長に電話をかけてこの男の話を取次いでくれ給え。製鉄所の公会堂で武道試合を見ている筈だから……多分、非常召集になるだろう。遣り切れんよ全く……」

騒ぎがだんだん大きくなって行つた。盗まれた現金が十二万円という大金で、且つ、被害者の西村というのが、非常に評判のいい好人物だったせいでもあつたろう。一つには死骸が二人の職工の手で事務室へ抱え移されていたために、現場の模様が全くわからなくなつたので、取調べがだんだん大仕掛になつて行つて、犯人が逃込んだと思われる、木工、鑄造、薄板、第一工場の全部の職工が一人一人に訊問されたせいでもあつたろう。

もちろんその時には星浦警察署と町の青年の全員が工場の周囲を蟻ありの這い出る隙もないくらい包囲していた。取調べには署長以下、警部と、部長と刑事の全員がおおわらわ大童になつてスピードをかけたものであつたが、それでも見当が付かなかつたらしく、夕方になつて現場を見ていた三人の職工が今一度呼出されて、念入りの訊問の仕直しを喰つたが、それでも三人の答えは前の時とチツトも変らないばかりでなく、ピッタリと一致するところば

かりなので、何事もなく放免された。

製鉄所の裏門から銀行へ行つて、製鉄所の資金の一部と、職工の俸給の全部を受取った西村は、札束の全部を、いつもの通りに黒ズツクの鞆へ入れて、いつもの通りに銀行の前から人力車に乗つて製鉄所の裏門の前まで来た。それから矢張り、いつもの通りの近道伝いにテニス・コートを通り抜けて、事務室へ帰る途中を要撃されたものに相違ない。むろん西村はあのテニス・コートが、そんなに恐ろしい処と知らなかったであろう。八方に見透しの利く安全無比の通路と思つて通つたものであろう。同時に犯人は、工場内部の事情に精通している職工の一人に相違あるまい……という警察側の見込らしかった。

三人が警察の門を出た時には四隣がモウ真暗になつていた。生れて初めて警察官の取調らべを受けた又野は、すっかり毒気を抜かれたせいであつたろう。昼間の昂奮も、怒りも忘れたように、元の木阿弥もくあみのオンチ然たる悄気しよげ返つた態度に帰つて、三好と戸塚の後からトボトボと出て来たが、そのまま三人が三人とも黙々として、人通りの多い明るい道を合宿所の方向へ歩き出した。

その中うちに三人が揃つて薄暗い横町に曲り込むと、三人とも夢から醒めたように顔を見交した。

「オイ」

「何だい」

三人が揃って黒板塀の間に立佇まった。三好が帽子を脱いで頭を掻き掻き云った。

「俺は何だか大切な事を一つ警察で話し忘れて来たような気がするがなあ」

「何だい。すっかり話しちやったじゃねえか」と戸塚が眼をパチパチさせた。

「ウン俺も何か知らん、一番大切な事をば云い忘れて来たような気がするがならん」

又野が街燈の光りを仰ぎながら初めて微笑した。戸塚が、その顔を振り返りながら不安らしく云った。

「何も忘れた事あねえぜ。西村さんが殺されてよ……軍手をはめた手でなあ」

「そうよ。あの鉄の棒は警察で引上げて行つたろう。四分の一寸インチぐらいの細いパイプだつ

たが……なあ又野……」

「ウン。犯人は地下足袋を穿いとつたつて俺あ云うたが……」

「ウン。俺も地下足袋だと云つたがなあ」

「犯人が木工場へ這入るとコスモスの処を風が吹いたなあ」

「馬鹿。そんな事を云つたのかい」

「見た通りに云えと云うたから云うたてや」

「アハハハハ犯人とコスモスと関係があるのかい……馬鹿だなあ」

「アツ。そうだ。あの葉葉服の野郎が白いハンカチで汗を拭いたって事を云い忘れてた」と云ううちに三好が唇を噛んで警察の方向を振り返った。

「ウン。そうじゃそうじゃ。そういうえば俺も思い出いた。云うのを忘れとった。四角に折つてあつたなあ」

又野が、悪い事をした子供のように肩を窄めた。^{すぼ}その横で戸塚が冷笑した。

「アハ。汗を拭くのは大抵ハンカチにきまつてるじゃねえか」

「ウン。それもそうじゃなあ」

「しかし出来るだけ詳しく話せて云ったからな」

「ウン。それあそう云ったさ。しかしハンカチ位の事あ、どうでもいいだろう」と戸塚が事もなげに云い消した。三好が頭を搔いた。

「そうだろうか」

「そうだともよ。ナアニ。じきに捕まるよ。指紋てえ奴があるからな」

「木工場も鋳物工場の奴等も、呉^{くれ}工^{こう}廠^{しょう}から廻わつて来た仕事忙しいので、犯人が

通ったか通らないか気が付かなかつたらしいんだな。なあ戸塚……お前が通り抜けた時も、何とも云わなかつたかい」

「ウン。慌てていたせいか、鑄型を一箇所踏潰したんで、怒鳴り付けられただけだ」

又野が大きな欠伸^{あくび}を一つした。

「ああ睡むい。帰ろう帰ろう」

しかし三人の職工の予期に反して、この犯人はなかなか捕まらなかった。

二千人以上居る職工の身元の全部が、虱潰^{しらみつぶ}しに調べ上げられたが、その結果は意外

にも一人も居ない筈の赤い主義者の潜行分子が二三人発見されただけで終った。いよいよ職工以外の人間に着眼されなければならぬ順序になったが、しかしどこから見当を附けていいか、わからないしかった。

新聞では盛んに書き立てた……白昼の製鉄所構内で衆人環視^{うち}の中に行われた、天魔の如く大胆なる殺人強盗……犯人は大地に消え込んだか……実見者又野末吉氏談……前代未聞の怪事件なぞと……殊に後頭部を粉碎されながらも勇敢に抵抗した西村会計部員の奇蹟的な気強さを、製鉄所長と医学博士の談話入りで賞讃した。

西村の葬式は会社葬で執行された。職工たちの俸給はそれから二日遅れただけで、滞り^{とどこお}

なく渡された。

起業祭も寧ろ^{むし}平常よりも盛大に行われた。又野は皆から勧められて渋々角力に出場したが、懸賞附の五人抜にはどうしても出なかつたので、賞金は柔道の出来る構内機関手の手に落ちた。

そのうちに一箇月経つと警察もとうとう投出したらしく「遂に迷宮に入る」という新聞記事が出た。「十二万円の金の在^あ所と、犯人を指摘した者には一割の賞金を出す」という製鉄所名前の広告と一所に……。星浦製鉄所の内外はこの話で持ち切つた。又野の処へ改めて話を聞きに来る者もチヨイチヨイ出て来たが、又野は五月蠅^{うるさ}がつて何も話さなかつた。ほかの二人の職工を引合いに出すような事もしなかつた。

四

「なあ又野……戸塚の野郎が、何か大事な事を云い忘れてるってこの間、警察署を出てから云つたなあ……暗い横町で……」

「ウン。云うとつたが……それがどうかしたんかい」

「イヤ。別にどうって事はねえんだけど……」

葉葉服の三好と又野が、テニス・コートの審判席の処に跼しゃがんでいた。二人の背後うしろにはまだ半枯れのコスモスがパイに咲き乱れていた。久し振り半運転にした汽鐘場裏は、物を忘れたようにシインとして、晴れ渡った青空から太陽が暑いくらい降り注いでいた。

瘡せつぼちの三好は神経質らしく、擬まが鱈いっこうぶち甲縁の眼鏡をかけ直して云った。

「戸塚の野郎は、俺あ赤じゃねえかと思うんだがなあ」

逞ましい腕を組んでいた又野が血色のいい顔を不愉快そうに撫でまわした。

「どうしてかいな」

「どうしてって事もねえけど、何だかソナ気がするんだ。第一、彼奴あいつはツイこの頃就職して来やがったんだろう。それから、あんなに慣れ慣れしく俺達に近寄って来やがった癖に、あの事件のちから後、急に俺達と他所よそよそ所しくし初めただろう。出勤でるにも帰宅かえるにも一人ポツチで、例の処へ誘つても一所に来やがらねえ。おまけにアレのちから後というもの、シヨツチュウ何か考えているような恰好をしているじゃねえか」

「ウン。そう云うてみれあ、そげなところもあるなあ。あれのちから後、このテニス・コートを何度も何度もウロウロしているのを見た事がある」

「なあ。そうだろう。俺も見たんだ。だから怪しいと思ったんだ。そうしたらこの頃はチヨットもここいらへ姿を見せなくなつた代りに、隙ひまさえあれば第一工場に遊びに行きやつて、あそこのデツキ連中と心安くしているようだし、死んだ西村さんの家へ行つて色々世話をしているかと思うと、事務所の連中とも交際つきあうようになって、行きと帰りには毎日のように事務室に寄つて行くらしい氣ぶりじゃねえか」

「ウン。そらあ俺も氣は附いとる。しかし何も、それじゃけに戸塚が、赤チウ証拠にやあなるめえ」

「ウン。それあ証拠にやあなるめえさ」

と三好は慌てて鼈甲縁をかけ直した。

「証拠にやならねえが……俺達が味方にならねえと諦あきらめて、ほかの処へ同志アジを作りに行つたものと思えば、そうも見えるだろう」

そう云ううちに三好は、菜葉服のポケットからバツトを出して、又野にも一本取らせて火を点つつけてやつた。

二人はコートのどかの端の草の上に尻餅を突いた。工場の上を長閑に舞っている二羽の鳶を二人とも仰ぎ見た。その上を流れる白い雲も……。

「恐ろしい疑い深い人間やなあお前は……」

又野はイヨイヨ不愉快そうに顔を撫でた。その横頬を熱心に見ながら三好は笑った。

「ハハハ。まだあるんだぜ。戸塚があの死体を西村さんと云い出すなり、直ぐに俵給泥棒と察して、追かけて行つた時の素早かつた事はどうだい。普通^{ただ}じゃなかつたぜ。あの意気
込は……」

「あの男は頭が良^ええけになあ。何でも素早いたい。今に限つた事じゃなか」

「それがあの時は特別だつたような気がするんだ。何もかも最初から知り抜いていたような気がするんだ。この頃になつてやつと気が付いたんだが」

「フーン。そげな事が出来^でるかなあ」

「そればかりじゃないんだ。彼奴^{あいつ}は警察でわざと大事な事を云い落しやがつたんじゃねえかと思うんだ。俺に云い中^あてられて、慌てて云い消しよつたらう」

「ハンカチの話かな」

「ウン。あのハンカチの一件は一番カンジンの話なんだが、戸塚の野郎が正直^{まとも}に話すか知らんと思つたから、俺は別々に訊問された時もわざと云わずにおいたんだ。そうして様子を探つてみたんだ」

「疑い深いなあ……お前は……」

「まだあるんだ。あの時の犯人は新しい地下足袋を穿いていたろう。コートの湿めった処に太陽足袋の足跡が、ハッキリと残っているのを君も僕も見ただじやないか。西村さんを抱え上げた時に……」

「ウン……見たよ」

「あれを戸塚が見やがった時に気が附きやがったに違いないんだ」

「何を……」

「犯人がインテリだって事を……」

「インテリたあ何かいな……インテリて……」

「学問のある奴だって事よ。知識階級……つまり紳士って意味だね。ねえ。そうだろう。

あんなに真白い、四角く折ったハンカチなんか菜葉服の野郎が持つもんじゃねえ。タツタ
ひとうち
一撃で殺つ付けるつもりだったのが、案外な抵抗を喰ったもんだから思わず汗が出たん

だね。そいつを拭こうとして、うっかりポケットからインテリの証拠を引っ張り出して拭
いちやっつたんだ。新しい地下足袋つてのは間に合わせの変装用に買ったものに違えねえん
ちげ
だ」

「お前のアタマの方が、戸塚の頭よりもヨツポド恐ろしいぞ」

「アハハハ。冷やかすなつてこと……アタマは生きてる中使つとくもんだ。まだあるんだぜ。……いいかい……西村さんが十四銀行から金を出して来るのはいつも十の日の朝で、九時キツカリらしいんだ。それから人力車に乗つて裏門で降りて、ここを通つて事務室へ行くんだろう……なあ……しかもここは、いつも芝居の稽古をやっている処だし、どんなに大きな声を出したつてスチームの音で消えちまうんだから、誰が見ていたつて本当の人殺しとは思わない。まさかに真昼間、あんな大胆な真似をする者が居ようなんて思い付く者は一人も居ないだろう。見ている人間は皆芝居の稽古だと思つてボンヤリ眺めているだろう……だから、真夜中の淋しい処で殺るよりもズツと安全だつていう事を前から何度も何度も考えて、請合い大丈夫と思ひ込んで計画した仕事に違いないんだから、ヨツポド凄^{あたま}い頭脳の奴なんだ。職工なんかにこの智慧は出ねえね。インテリだね。どうしても……」

「フーム……」

又野はバツトを横^{よこぐわ}啣えにしたまま白い眼で三好をかえりみた。膝を抱えたまま……。

「お前もインテリじやなかとな」

三好は又野に睨まれてチョット鼻白んだ。

「インテリじゃねえけども……あれから毎日毎日考えてたんだ。だからわかったんだ」
「犯人の見当が付いたんか……そうして……」

「付いてる」

「エッ……」

「チャンと犯人の目星は付いてるよ」

又野はジロリとそこいらを見まわした。真正直な、緊張した表情でバットの灰を弾いた。

「戸塚が犯人て云うのか……お前は……」

「プッ……戸塚が犯人なもんけえ。俺達と一所に見てたじゃねえか。犯人なもんけえ」

「誰や……そんなら……」

又野が突然にアグラを搔いて、真剣な態度で三好の方向に向き直った。バツタが驚いて二三匹草の中から飛上った。

三好は答えなかった。事務室の方向を鼈甲縁越しにジイツと見ていたが、そのまま非常に緊張した、青褪めた顔をして云った。

「誰にも云っちゃいけないぜ。懸賞金は山分けにするから……」

「そげなものはどうでも良え。西村さんの仇讐をば取ってやらにや」

三好はやつと振り返った。

「それよりも、もし戸塚が万が一にも赤い主義者だったら大変じゃねえか。君は在郷軍人だろう」

「ウン。在郷軍人じゃが、それがどうしたんかい」

「どうしたんかいじゃねえ。彼奴^{あいつ}の手に渡ると十二万円が赤の地下運動の軍資金になっちまうぜ」

「ウン。それあそうたい」

「腕を貸してくれるな……君は……」

「ウン。間違いのない話ちう事がわかつたら貸さん事もない」

「そんなら耳を貸せ」

三好は又野の耳に口を当てて囁いた。

「その犯人が今ここに来る」

「エッ……」

「見ろ……今事務室の方からテニスの道具を持った連中が五人来るだろう。あの中に犯人が居ると俺は思うんだ。いつでもここでテニスを遣りよる連中だ。ここで何度も何度もテ

二スを遣つて、ドンナ大きな声を出しても、ほかに聞こえない事をチャンと知っている奴が、思い付いた事に違えねえじゃねえか。見てろ……俺の云う事が当たるか当たらねえか……」

「サア……」

そう云う又野の表情が、いくらか緊張から解放されかけた。三好の推測が、すこし当^{あて}推^い量^{りよう}に過ぎるのを笑うつもりだった……が……その笑いかけた顔が間もなく、前よりもズツと青白く緊張して来た。審判席の草叢^{くさむら}の中から、コスモスの花の中へジリジリと後退^{あとしげ}りをし初めたが、その肩に手をかけて、又野と同じ方向を見ていた三好も、すこし慌て気味で中腰になった。

「オイ。いけねえいけねえ。あの中に戸塚が居やがる」

「……ウン……居る。あの奴もテニスの連中に眼を付けとるばい。……不思議だ……」

又野が深い、長い溜息を吐いた。

「不思議どころじゃねえ。早く隠れるんだ。俺達二人が揃っているのを戸塚に見られちゃ面白くねえ。……こつちに来たまえ」

三好と又野は慌てて草の中から立上った。二人とも何気なくバットの吸いさしを投棄^{ひっかえ}て、薄暗い汽罐場へ引返した。ボイラーから程遠い浴場の煉瓦壁に、三ツ並んで残つて

いる古いパイプの穴から、肩をクツ付け合わせてテニス・コートを覗いた。二人の目の前にコスモスが眩しくチラチラして邪魔になった。

ネットはもう張られていた。

第一製鋼工場の副主任の中野学士と、職工の戸塚と、事務室の若い人間が三人来て軟球の乱打ちを始めていた。中野学士と戸塚が揃いの金口を啣くわえていた。

「オイ、三好。中野さんと戸塚の野郎は前から心安いんか」

三好が灰白い光りの中で片目をつぶって笑った。

「戸塚は中野さんの世話で製鉄所こてへ入ったんだ。自分でそう云ってたじゃねえか」

「そうじゃったかなあ……忘れた……」

「中野さんの処へ戸塚の妹が、女中になつて住込んでいる。その縁故なんだ」

「そうじゃったかなあ……なるほど……」

「中野さんは九大出の秀才で、柔道が三段とか四段とか……」

「うん。それは知つとる。瘠せとるがちよつと強い。一度、肩すかしで投げられた事がある」

「この頃、社長の星浦さんの我儘娘を貰うことになっているんだ……中野さんが……」

「知つとる。あの孔雀さんちうモガじやろ」

「ウン。それで社長から海岸通りに大きな地面を貰っているんだが、結婚前に家を建てなくちやならんし、自動車も買わなくちやならねえてんで、中野さんが慌て出している。相場に手を出したり、高利貸から金を借りたりしているっていう戸塚の話だ」

「戸塚の妹が喋舌しゃべつたんか」

「そうらしいよ」

コスモスの向うの中野学士はほかの四人の指導者コーチャー格らしく、中央のネット際に立つて前後でボールを打ち合っている四人に色々苦情を云い初めた。

「戸塚ツ……お前はどこでテニスを遣つたんだっけね」

「中学で遣つたんです。後衛でしたか」

「スタートが遅いね。我流だね。ホラホラ……」

「ええ。この拝借した地下足袋が痛くつて……」

「ハハハ……俺の足は小さい上に、足袋が新しいからね」

「これ……太陽足袋ですね」

「ウン……すべにらないと云うから試しに買ってみたんだが……やっぱりテニス靴の方がいい

ね。窮屈で、重たくて、這る事は同じ位、這るんだからあそこに投込んでおいたんだ」

「いつ頃お求めになったんですか」

「……………」

「非常に丈夫そうですが、どこでお求めになったんで……」

「……………」

中野学士は返事をしなかった。直ぐに真向うの事務員の一人を叱り飛ばした。

「馬鹿……そんな遠くからトップを打ったって利かん利かん……ソレこの通り……ハッハッハ……」

と高笑いをするうちに、その事務員の足の下へ火の出るようなヴオーレーをタタキ返した。その得意そうな背後姿を睨みながら、戸塚が地下足袋の裏面をチョット裏返してみた。そうして何気ない恰好で、飛んで来る球に向って身構えたが、間もなく顔中に勝ち誇ったような冷笑を浮かみ上がらせた。

三好と又野は壁の穴から身を退いて、恐る恐る顔を見交した。二人とも笑えないほど緊張していた。やがて又野が深い、長い溜息を一つした。

「……………そうかなあ……彼奴かなア……」

セカセカと眼鏡をかけ直しながら三好はうなずいた。又野は茫然となった。

「そうかなあ……ヘエーッ……」

「まだ疑っているのかい。タツタ今、自分で犯人だつて事を自白したじゃねえか」

「……フーム……」

「又野君……」

「……………」

「今夜、俺と一^{いっしょ}所に来てくれるかい」

「どこへ……」

三好の眼鏡が場内の電燈を反射してキラリと光った。命令するように云った。

「どこへでもいいから一所に来てくれ。六時のボーが鳴ったら俺が迎えに行く。俺一人じや出来ねえ仕事だかな」

又野が黙つて腕を組み直して考え込んだ。三好が冷然と見上げ見下した。

「嫌になつたのかい。それとも怖くなつたんかい……」

「ヨシッ……行く……」

「きつとだよ」

「間違いない」

「大仕事になるかも知れないよ」

「わかつとる」

「生命いのちがけの仕事になるかも……」

「ハハハ。わかつとるチウタラ……」

五

星浦製鉄所はさながらの不夜城であつた。鎔よう鋳こう炉、平炉へいろから流れ出すドロドロの鉄の火の滝。ベセマー炉なかぞらから中空に吹上げる火の粉こと、高熱瓦斯ガスの大光焰。入れ代り立代り開く大汽罐ボイラーの焚たきぐち口。移動する白熱の大鉄塊。大坩堝るつぼの光明等々々が、無数の煙突から吐出す黄烟、黒烟に眼も眩くらむばかりに反映して、羅馬ローマの滅亡の名画も及ばぬ偉観、壯観を浮き出させている。その底に整然、雜然と並んでいる青白いアーク燈の瞬きが、さながらに興国日本の、冷静な精神を象徴しているようで、何ともいえず物凄いい。

第一製鋼工場の平炉は今しも、底の方に沈んでいる最極上の鋼鉄の流れを放流しつくし

て、不純な鉋石混りの、俗に「鉋」^{かわ}と称するドロドロの火の流れを、工場裏の真暗い広場に惜し気もなく流し捨てている。

暗黒の底に水飴^{みずあめ}のように流れ拡がる夥しい平炉の白熱鉋流は、広場の平面に落ち散っている紙屑、藁屑^{わらくず}、鋸屑^{おがくず}、塗料、油脂の類を片端から燃やしつつグングンと流れ拡がって行く。その端々、隅々から赤や、青や、茶色の焰がポーツと燃え上るたんびにそこから中が明るくなって、又、前にも増した暗黒を作って行く物すごい光景を、薄板工場の中から湧き起るケタタマシイ雑音の交錯が伴奏しつつ、星だらけの霜の夜を更けさせて行く。その数百坪に亘る「鉋」^{かわ}の火の海の上へ、工場の甲板^{デッキ}から突出している船橋めいたデッキの突端に、鳥打帽、菜葉服姿の中野学士が凝然と突立って見下している。地の下から噴き出す何かの可燃性瓦斯^{ガス}が、火の海の中央を噴破^{ふきやぶ}って、プクリプクリと眩しい泡を立てている、その一点を凝視したまま動かない。その瘠せた細面にかけた金縁の眼鏡に火の海が反射して小さな閃光を放っている。

その背後^{うしろ}にモウ一人、職工姿の戸塚が、影法師のように重なり合って突立っている。鳥打帽を冠^{うしろ}って、眼鏡をかけているところまで中野学士とソックリである。それが中野学士の背後^{うしろ}から覗き込むようにして、何かヒソヒソ囁やいている様子であつたが、やがて返事

を催促するかのようにな中野学士の肩に両手をかけてゆすぶった。

「返事はどうですか……中野さん……」

「……………」

「ここで返事すると云ったじやありませんか……ええ……」

「……………」

「貴方^{あなた}は今夜は現場勤務じやないでしょう。出勤簿には欠勤の処に印^{はん}を捺しておられるでしょう」

中野学士が微かにうなずいた。それから悠々と金口煙草を一本出してライターを灯^つけた。

「……あつしを……それじや……オビキ出すために、あんな事を云ったんですか……ここまで……」

戸塚は脅^おびえたように足の下の火の海を見た。中野学士がそう云う戸塚の顔を振返って冷然と笑った。白い歯並^{やみ}が暗に光った。

「暑いじやないですかここは……丸で蒸^むされるようだ」

「……フン……百二十度ぐらいだろうな……この空気は……フン……」

「……あっちに行つて話しましょうよ。もつと涼しい処で……」

「……イヤ。僕はここに居る。ここで考えなくちゃならん」

「何をお考えになるんですか」

「この鍛の利用方法さ」

「この火の海のですか」

「ウン……この鍛の中には最小限七パーセント位の鉄分を含んでいる。この中から純粹の鉄を取るのは、非常に面倒な工程が要るので、こうやって放置して、冷却してから打割つて海へ棄てるんだが、折角、^{せつかく}こうして何千度という高熱に熱したものを、無駄にするのは惜しいものなんだ。ほかの技師連中はコイツをブロックにするとか、瓦を作るとか云つて騒いでいるが、僕一人で反対して頑張っているんだ。だから、いつも職工が帰ってからここに來て、この火の海の中から簡単に純鉄を取る方法を考えているんだがね」

「今も考えているんですかい」

「ウン……重大なヒントが頭の中で閃めきかけているんだ。暫く黙っていてくれ給え」

戸塚は自然度^{じれった}そうにそこいらを見まわして舌打ちをした。

「チエツ……いい加減、馬鹿にしてもらいますめえぜ。十二万円の話はドウしてくれるんですか」

「十二万円……何が十二万円だい」

「……………」

「十二万円儲かる話でもあるのかい」

戸塚は哑然となつたらしい。狭いデツキの上で、すこし中野学士から離れた。

「……呆れたね……」

「そんな話は知らないよ僕は……夢を見ているんじゃないか君は……」

戸塚の眼が眼鏡の下でキラリと光った。葉葉服の腕をマクリ上げかけたが又、思い直したらしく、鳥打帽を脱いで頭を下げた。

「……イヤ……中野さん。決して無理は云いません。四半分でいいんで……ねえ。それ位の事はわかつてくれてもいいでしょう。貴方は大学を一番で出た優等生だ。これから出世は望み次第だ。第一頭がいいからね。西村さんを殺った腕前なんぞ凄いもんだぜ」

中野学士の眼鏡が反撃するようにピカリと赤く光った。

「……失敬な……失敬な事を云うな。西村を殺したのは貴様か、三好と二人の中の一人だろう」

戸塚は冷然と笑った。

「へへへ。その証拠は……」

「九月の末に、お前と三好と俺とでテニスを遣った事があるだろう」

「ありましたよ。三好が、あつしに勧めて貴方にお弟子入りをしようじゃないかと云い出したんです。三好が、一番下手なんで、貴方が三好ばかりガミガミ云ったもんだから、あれつきり来なくなっちゃったんですが……」

「ウム。あの時に会計部の西村がコート横を通りかかったろう」

「へへ。よく記憶おぼえているんですね」

「今度の事件で思い出したんだ。……あの時も半運転だったからスチームの音がしなかったが、その西村の顔をジロリと見た貴様が……イヤ……三好だっけな……スチームが一パイ這入ってれあここで鷲鳥を絞め殺したって、生きながら猿の皮を剥いだって大丈夫だ……ってな事を云ったじゃないか」

「そんならそれを聞いた貴方と、三好と、あつしと、三人の中の一人が犯人でしよう」

「俺はソナ事をする必要はない」

「必要はなくても貴方に間違いないですよ」

「何……何だと……」

「へへへ……あの時に貴方の仕事を、ズツと向うの事務所の前から拝見していたのは、あつしと三好と、又野の三人ですぜ。貴方は近眼だからわからなかったんでしようけど……貴方は警察に呼ばれて話をしたのが又野一人と思つていらつしたんですか。又野が一番正直者ですから代表に名前を出されただけなんですぜ。へへへ……貴方にも似合わない迂濶うかつな新聞の読み方をしたもんですなあ」

「……………」

「ねえ。そうでしょう。立役者は何と云つたつて貴方一人だ。貴方にはチャンとした必要があつたんだ。だからあの話から思い付いて、万が一にも抜目の無えねつもりでキチンとした計画を立てたのが、いけなかつたんですね。つまり貴方の頭が良過よすぎたんだ」

「……………」

「ねえ。そうでしょう。今貴方がお穿きになつてゐるその新しい太陽足袋ですね。そいつがきょう、テニス・コートで物をいっちゃつたんでさあ。あの話は、ほかの連中もみんな聞いているんですからね。あつしが出る処へ出れあ、証人はいくらでも……」

「よしッ。わかつたッ。もう云うな……半分くれてやる」

「エッ。半分……」と戸塚が叫んだ。

「……へエツ……半分ですって……」

「同じ事を二度とは云わん。テニスの道具を蔵^{しま}つてあるあの部屋のラケット箱の下に床板の外れる処^が在る。その下に在る新聞紙包みをここへ持つて来い」

戸塚は茫然となつて相手の顔を見た。相手の顔はニコニコしていた。

「……馬鹿……何をボンヤリしているんだ。その新聞紙包みをここに持つて来いよ。分けてやるからな。テニス倉庫の鍵はこれだ。ホラ……」

戸塚は何という事なしに、慌てて頭を一つ下げた。鍵を受取つてポケットに入れようとしたが、その一刹那^{せつな}に片手でデツキの欄干^{てすり}に掴まつていた中野学士が鮮やかな足払いをかけた。

「アツ」と叫ぶなり戸塚はモンドリ打つて火の海へ落ちて行つた。

「ボオオ——ンンン……」

それは十海里も沖で打つた大砲のような音であつた。火の海の表面から湧き起つた灰^{ほのき}、黄色^いい水蒸気と、煙と、焰の一団が、渦巻き合いながら中空の暗^{やみ}へ消え入ると、あとに等身大の大的字形^{なり}の黒い斑点が残つていたが、それとてもやがて又、何の痕跡も留めない赤い火の海平面に復帰して行つた。

ただ、それだけであつた。

六

中野学士はポケットから白いハンカチを出して顔を押えていた。それでも噎^むせるような焼死体の異臭に鼻を撲^うたれてペツペツと唾液を吐いた。

その序^{ついで}にニツコリと笑つて平炉の広い板張のデツキへ帰りかけたが、そのニコニコ笑^{わらい}が突然に、金縁眼鏡の下で氷り付いてしまった。

板張りのデツキへ帰る三尺幅ぐらいの鉄の橋の向うに一人の巨漢がこつちを向いて仁王立になつている。火の海の光りを反映した、その顔は怒りに燃えているようである。高やかに組んでゐる両腕の太さは普通人の股ぐらいに見える。

中野学士は思わず半歩ほど後へ退^{さが}つた。キツと身構えをしてその男を白眼^{にら}んだ。折柄、遙か向うで開いた汽罐場のボイラーの焚口が、向い合つた二人の姿を切抜いたように照し出した。

中野学士はジリジリと身構えを直しながらも左右の拳^{こぶし}を握り締めた。「何だ君は……」

相手の巨漢は動かなかった。「俺は汽罐部の又野という釜焚きだ」

「知っている。……職場以外の人間がこのデツキへ上る事は厳禁だぞ。俺はここの主任だぞッ」

中野学士の語尾が少し甲走かんぱしった。又野の瞳がキラキラと光った。

「知つとる……貴様は今、何をしようた。俺の仲間の戸塚をどうしたんか」

「戸塚は自分で這つて落ちたんだ」

「……嘘吐こけ……」

「退どけと云うたら退どけ……」

中野学士は相手が自分を殺すような乱暴者でない事を確信していたらしい。同時に自分の柔道の段位にも、相当の自信を持っていたらしく、イキナリ真正面から又野を突き退のけてデツキの平面に立つと、間髪を容れず、立直つて来る又野の足を目掛けて、猛烈な足払いをかけた……が……ビクともしない……と思つた瞬間に又野の巨大な両手おわきが、中野学士の襟首にかかつて、ギューギューと絞付けて来た。

「エベエベエベエベエベ……」

という奇妙な声を上げたと思うと中野学士は、背中と尻のふくらみを又野の両手に掴ま

れたまま、軽々と差上げられていた。

又野は怒りの余り、中野学士を火の海へ投込むつもりらしかったが……トタンに、それと察した中野学士が無言のままメチャクチャに手足を振まわし初めたので、又野は思わずヨロヨロとなつてデッキの端に立止まった。

その時に誰かわからない真黒い影が、突然に平炉の蔭から飛出して来た。又野の腰を力一パイ突飛ばすとそのまま、後も見ずに逃げて行つた。

「アッ……」

と又野は前へのめつたが、振返る間もなく中野学士を掴んだままギリギリと一廻転して、真逆様まつさかさまに落ちて行つた。

しかし又野は下まで落ちて行かなかつた。

ちようど又野の両足の間に、鉄板の腐蝕した馬蹄型の穴が在つた。そこに又野の左足の踵かかとが引つかかつたために、片足で逆釣りに釣られたまま中野学士の背中と尻をシツカリと掴んでいた。同時に中野学士の顔は、四尺ばかりを隔てた真上から火の海に直面してしまつたので、その恐ろしい火熱あつに焙あぶられた中野学士は地獄のような悲鳴をあげた。

「……ガガアーツガガアーツ……助けて助けてツ……」

金剛力に掴まれた中野学士の服地がベリベリと破れ裂け初めた。

「動いごいちやイカンイカン。中野さん。助けます助けます……動いごいちや……イカン……」

又野も絶体絶命の涙声を振り絞った。

「オーイ。誰か来いッ。誰かア……誰か来てくれエエーイッ。オオ——オオ——イッ。あばれちやいかん。あぶないあぶない……」

「何だ何だ」という声がデツキの上の闇から聞こえて、ガタガタと二三人走って来る足音がした。

しかし中野学士の耳には這入らないらしかった。火焰と同じくらいの熱度を保もった空気に迫られて動くまいとしても動かずにいられたかったのであろう。死物狂いに手足を振り動かして火の海に背中を向けようとした。

「ギヤアギヤアギヤア……ギヤギヤギヤギヤッ……」

と人間離れのした声を立てた。その背中を掴んでいる又野も、絶体絶命の赤鬼みたような表情に変った。自分の踵がポリポリポリと碎けて脱け落ちそうな苦しみの中に、息も絶え絶えになって喘いだ。

「ハッハッハッハッ……あばれちや……いかん……ハッハッハッハッ……動いごいちや……」

折柄起った薄板工場の雑音のために、その声は掻き消されて行つた。

その時に中野学士の胸のポケットからハミ出していた白いハンカチが、フワリと火の海の上に落ちてメラメラと燃え上つた。トタンに中野学士が人間の力とは思われぬ力と声を出した。

「……グワ——アアッ……」

中野学士のお尻の処きれじの布地が、又野の指の間で破れて、片足が足首の処まで火の海の中へ落ち込んだのであつた。同時に硫黄臭い水蒸気と、キナ臭い煙を多量に交えた焰が燃え上つて、又野の顔から胸の処まで包んだ。しかしそれでも又野は中野学士の背中を離さなかつた。中野学士も又野の両腕にシツカリと抱き付いたまま膝から下を燃やしていた。

近付いて来た足音が、その上で立止まつた。

「ここだここだ。ワツ。臭いッ」

「ウア——。大変だ。人間が焼け死によるぞッ」

暁の光りと、明け残った半月の光りが、雪のように真白な大地の霜を、静かに照ししていた。

星浦駅前の砂利だらけの広場に、淡い影法師を落しながら、鼈甲縁の眼鏡をかけた三好がスタスタと遣つて来た。とても職工とは見えないスマートな茶縹の背広服に黒い冬オーバーの襟を深く立てて、左脇に四角い新聞紙包みをシツカリと抱えている。

一番汽車に乗るつもりであろう。暗い待合室に這入ったが、まだ時間が早いし、切符売場の窓が開いていないので、ちよつと舌打をしたまま悠々と出て行こうとした。その序に、黄色い電燈に照らされた待合室を見まわすと、ギョツとしたらしく立止まった。

改札口に近い右手の片隅には、青いネルの布片に頬冠ぬのきりりをして毛布で身体からだを包んだ老婆が、シツカリとバスケットに獅噛しみ付いて眠っていた。

その反対側の入口に近い処に、全身を繃帯で真白に包んだ、スバラシク巨大な大入道が、腰をかけていた。その左足には石膏か何か嵌はまつているらしく、普通の人間の胸ぐらいの大きさになっている。おまけに履物も何も履いていないので、綿と繃帯で包んだ白い象の足みたいな足の裏が泥だらけになっている。

三好は、あんまり意外千萬な人間の姿を見てビックリしたらしく立竦たちすくんだ。……コン

三好 of 叫び声を聞いた駄夫や駄員と、あとから人力車に乗って来た乗客が二三人、近寄って来たが、あんまり奇妙な光景なので、茫然として入口に突立ったまま見ていた。

その時に白坊主が、三好の耳に鼻の穴を近づけた。カスレた声で囁いた。

「……俺が誰か……わかるか……」

「ウア——ツ……ウワア——ツ……」

と三好は悲鳴を揚げて藻掻き狂った。相手の声を聞くと同時に、恐怖が数倍したらしかった。スマートな長身の若紳士が、真白い大入道に抱き付かれて、半狂乱に暴れている光景……それを通じてわかる白入道の超人的な怪力と、血も涙もない冷静な怒り……見ている連中は石のように固くなってしまった。

「……幽霊だあッ……ウワア——ツ……」

「幽霊じゃない……」

白坊主が底力のある声で云った。

「貴様に焼き殺され損のうた又野たい。死んだ三人の仇讐^{かたき}をば取りに来たとたい」

「ウワ——ツ。助けてくれ……俺が悪かった。俺が悪かった。十二万円遣る……ホラ……」

三好が投げ出した新聞紙包みが、白坊主の肩を越して、背後^{うしろ}の腰掛にドタンと落ちた。

「ハハハ。十二万円ぐらいじゃ足らん」

白坊主の声がだんだん慥かに、大きくなつて来た。取巻いてゐる人間が皆聞いていた。
「……十二万円ぐらいの事でここまで来はせん。……俺は五体中を火傷した儘、今朝、製鉄所の病院で息を吹き返した。……それでヒョツと貴様が、昨夜のうちに金を探し出して、ここへ来はせんかと思つて、死ぬる思いで、暗いうちに病院を脱出して、塀を乗り越えて、ここへ来たんだぞ。眼の眩むほど痛いのを辛棒して待つておつたんだぞ。貴様の生命を貰おうと思つて……」

そう云ううちに白坊主は、相手の返事を聞くべく、すこしばかり両手を緩めた。

「ウワ——ッ。違う違う……皆さん。こいつの云う事は皆嘘です。キチガイです。どぞ……どうぞ……助けて下さい。僕を殺しに来てゐるんです。キチガイ病院から抜け出して……」

「ハハハ……何とでも云え……今度の事件は皆、貴様がたくらんだ事じゃ。戸塚に智恵を附けて、中野学士をそそのかして西村を殺させた。それから俺を使うて、あげな非道い事をさせたに違わん。俺は今朝、気が付いてから色々考えとるうちに、やっとわかつたんじゃない。貴様こそ、この製鉄所に入込んだる赤い主義者の頭株に違いないぞ……もう助からん

ぞ……」

「ウハアツ……違う違う。タ、助けて下さい。皆さん助けて下さい。……コイツはキチガイ……」

「畜生……まだ云うかッ……」

白坊主は三好を抱えたまま腰かけの上に坐り直した。両腕にグツと力を入れ初めた。

「ギヤアギヤアギヤアギヤアギヤア……」

それは鳥とも獣とも付かぬ声であった。必死の努力で手足を突張りながら、白い繃帯の上から又野の両腕に噛み付いたが、何の役にも立たない事がわかった、又叫び初めた。

「ギヤギヤギヤギヤ、ギイギイギイギイツ……」

往來を通りかかっていた人が皆、走り集まって来たので待合室の中が急に、暗くなった。その中で三好の左右の肩骨がゴクンゴクンと折れ離れる音がした。

「ダダッ。ガガッ。ギイギイギイ——ッ……」

青鬼のようになった三好の両眼が、ほおずき酸漿のように真赤になった……と思ううちに鼻の穴と、唇の両端から血がポタポタと滴したたり出した。

余りの恐ろしさに見物人がドロドロと背後うしろに雪崩なだれた。その背後うしろから佩剣はいけんの音がガチ

ヤガチャと聞こえて来た。

「どこだ……どこか……」

「ここです」

「ここで絞め殺されよります」

と店員風の若い男が二人を指した。ゆびさその間を押し分けた制服の巡査が、肩を怒らして這は入って来たが、白い大入道に抱きすくめられて血を吐いている人間の姿を見ると、

「アッ」

と云って棒立ちになった。

その巡査の眼の前のコンクリート凝土の上に又野は、三好の死骸をドタリと突き放した。血に染まった丸坊主の両腕を突出してヨロヨロと立上った。腰をかがめてヒョコリとお辞儀をした。

「酒田さん。私は昨夜、第一工場で貴方のお世話になった又野です。大火傷やけはたをしました製鉄所の職工です」

「……何だ……又野か……」

巡査はホツとしたらしかった。そうして背後うしろを振返りながら群衆を追い払った。

「退^のけ退^のけッ」

疎^{まば}らになった群衆の背後^{うしろ}から、今出たばかりの旭^{あさひ}がキラキラと映^さし込んで来た。

白坊主の又野は眼を細くしてその光りを仰いだ。嬉しそうな、落付いた声で云った。

「十二万円は私の背後^{うしろ}に在ります。その新聞紙包です。……私は犯人の三好を絞め殺しました。これで、やっと腹が癒^いえました。……縛^くって……下さいませ——」

そうして氣力が尽きたらしく、両手を前に突出したまま、見物人の中央にバツタリと倒れた。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年10月22日第1刷発行

入力：柴田卓治

校正：ちはる

2001年3月23日公開

2006年2月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

オンチ

夢野久作

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>